

啓示 22 : 17 についての考察

啓示 22:17 は「ものみの塔聖書冊子協会」の新世界訳ではこうなっています。
「そして、霊と花嫁は、「来なさい！」と言いつづける。そして、だれでも聞く者は、「来なさい！」と言いなさい。そして、だれでも渴いている者は来なさい。だれでも望む者は命の水を価なくして受けなさい。」

しかし、他の聖書はどの翻訳も次に例として挙げる新共同訳と同様の訳し方をしています。

「“霊”と花嫁とが言う。「来てください。」これを聞く者も言うがよい、「来てください」と。渴いている者は来るがよい。命の水が欲しい者は、価なしに飲むがよい。」
(新共同訳)

異なる点は、「言い続ける」と「言う」の違い、そして「来なさい」を「来て下さい」としている点です。

聖書が書かれたギリシャ語ではどうなのでしょう。

ここで、啓示 22 : 17 の原文をご紹介しますおきましょう。(節の最初の部分)

καὶ τὸ πνεῦμα καὶ ἡ νύμφη λέγουσιν, Ἔρχου.
カイ ト プニューマ カイ エ ニュンフェー レゴウシン、 エルコー
そして 霊 花嫁 言う 来る

ギリ語：エルコーはキリストがマタイ 24 章などで、終わりの日に関して、ご自分の [到来] について語られた中で使われた [エルコーメノン] と基本的に同じ語句です。

さて、新世界訳はこの中の、ギリ語：レゴウシン [言う] を「言い続ける」と訳している訳ですが、この語が使われている、他の聖句については、単に「来る」と訳しています。この語は、当然ひんぱんに出て来ますが幾つかの例を挙げてみます。

(マルコ 6:37) 「イエス」は答えて言われた [レゴウシン], 「あなた方が彼らに何か食べる物を与えなさい」。すると彼らは言った, 「わたしたちは出かけて行って二百デナリ分のパンを買い, [それを] 人々に与えて食べさせましょうか」

(啓示 10:11) 「そして彼らはわたしに言う [レゴウシン] …」

(啓示 2:24) 「サタンの奥深い事柄」を知るようにならなかった者たちに言う [レゴウシン] …」 (すべて新世界訳)

それで、「レゴウシン」を「言う」ではなく「言い続ける」と訳している理由が、

もし語句そのものにそうしたニュアンスがあるのなら、どの場合でも、同様の訳し方をするのが本筋だと思いますが、ここに限って「続ける」を付け加えて翻訳しているのには何らかの理由があるはずで、推察するところそれは、この聖句に、継続的に語り続ける必要のある特定の概念、つまり伝道活動を示唆しようという意図的なもくろみがある故と考えられます。

他の聖書翻訳が単に「言う」と訳しているのは元々のギリシャ語が単に「言う」という意味の語句を使っているからに他なりません。

では、もう一つの異なっている点、「来なさい」についてはどうでしょうか。

日本語は丁寧語、謙遜語など様々な表現の違いがありますが、欧米の原語はほとんどその区別はありません。英語では「来なさい」も「来て下さい」も「おいで下さい」もすべて「Come」です。

日本語では、自分と相手との立場、関係の上下によって変わって来ます。

「来なさい」というのは普通、目上の人に対するものではなく、同等もしくは、目下の者という認識が働くときにそう表現されます。

従ってこの訳し方だけを見ても、他の全ての聖書翻訳の学者たちと新世界訳聖書翻訳委員会の認識の違いが浮き彫りにされます。

ところで、新世界訳は、このギリ語:エルコー／来る（実際は主語がないので命令形）を17節では「来なさい」と訳しているのにすぐ後の20節では、同じ語句を「来て下さい」と訳していますので、ここでも一貫性がありません。

最もここはヨハネ自身の言葉で、その後に「主イエスよ」と呼びかけて、対象がはっきりしていますから、「来て下さい」になっているのでしょう。

と言うことは、17節の「霊と花嫁」は誰に向かって「来なさい」と言っているのでしょうか。この訳し方から、その対象が、少なくとも、霊と花嫁、そしてそれを聞く「乾いている」人々よりも上位の対象だとは考えていないということが分かります。

他の全ての聖書翻訳が「来て下さい」「来たりませ」と上位の方に対するものとして、この句を訳しているのを承知の上で、17節と20節を「来なさい」と「来て下さい」に敢えて訳し分けているのですから、それなりの理由があつてのことだと思われまます。

実際、最近の「ものみの塔」誌でもこの言葉は、「地上の樂園を受け継ぐ」大群衆の級に対する、継続的な伝道活動、集める業を意味していると説明されています。では、聖句そのもの、そしてその文脈は何を明らかにしているのでしょうか。

霊と花嫁は、どうして、ここで、このタイミングで、いきなり「来なさい」などと言っているのでしょうか。実際それは誰に対して述べているのでしょうか。文脈を読めばその答えは明らかです。

啓示 22 章の構成を簡単に分析しておきましょう。

先ず、22 章の冒頭は 21 章の「新しいエルサレム」に関する描写の続きであり、それは 5 節の「…そして彼らは限りなく永久に王として支配するであろう」という言葉で締めくくられています。

そして、続く 6 節からは、書全体の「結論」になります。

ですから、話しも、場面もすべて「振り出し」に戻ります。つまり、ヨハネが啓示を書き始めた時点に戻っています。6, 7 と啓示 1 章を読み比べて見るなら、同様の描写が見られることが分かります。

ついでながら、述べておきますと、実際に「預言」が記されているのは啓示 6：1 から 22：5 までの部分です。

その前と後が、それぞれプロローグまたエピローグであり、その両方で共通して強調されているのは、「この巻き物の預言の言葉を守り行なう者は幸いである」そして、「私は速やかに来る」という約束を繰り返しています。

七つの会衆に当てられたて音信の中にも同様の表現が見られます。

(啓示 1:3)「この預言の言葉を朗読する者、またそれを聞き、その中に書かれている事柄を守り行なう者たちは幸いである。定められた時が近いからである。」

(啓示 2:16)「…わたしは速やかにあなたのところに行き…」

(啓示 3:3)「…あなたが目ざめないなら、必ずわたしは盗人のように来る」

(啓示 3:20)「…見よ、わたしは戸口に立ってたたいている。」

そして、結末の所でもそれを強調しています。

(啓示 22:7)「見よ、わたしは速やかに来る」

(啓示 22:12)「『見よ、わたしは速やかに来る。そして、わたしが与える報いはわたしと共にある。各々にその業のままに報いるためである』」

私は「来る」と 2 度繰り返した後、私はイエスであると明確に自己紹介をされています。

「『わたしイエスは自分の使いを遣わし、諸会衆のためにこれらのことについてあなた方に証した。わたしはダビデの根また子孫であり、輝く明けの星である』」。この言葉に呼応して霊と花嫁は「来なさい」と言います。

誰に対してですか。この時点ではまだ一人も存在しなかった地的「大群衆」に対してですか。あり得ないでしょう。

誰がどんな読み方をしても、このタイミングで霊と花嫁が述べているのは、他ならぬ、「私は来る」と今述べられたイエス・キリストに対して「来て下さい」と反

応しているのは明らかではないでしょうか。

そしてその直後、三度目に強調して、(啓示 22:20) …『しかり、わたしは速やかに来る』。と語られ、今度はヨハネ自身がそれに呼応して、「アーメン！ 主イエスよ、来てください」。と述べているのです。

それで、(啓示 22:17)「だれでも聞く者は、「来なさい！」と言いなさい。」

という部分は、誰でも聞く者は「来て下さい」と言うように。それはつまり、イエスに信仰を働かせて、キリストを待ち望む態度を示しなさいということでしょう。

さて、最後に「霊と花嫁」は誰かということですが、「花嫁」は疑問の余地はないでしょう。王国を受け継ぐクリスチャンは、キリストの花嫁になぞらえられています。では「霊」は誰あるいは何でしょうか。

ここでもギリシャ語原文をご紹介します。

πνεῦμα τὸ ἅγιον.

プニューマ ト ハギオス

霊 神聖な

「霊」と訳されているのはギリ語：プニューマです。

このギリシャ語は、ヘブライ語「ルーアハ」の対語で、ヘブライ語聖書では、天地を創造した神の聖霊もルーアハ、文字通りの「風」もルーアハ、また霊者（神の人）をさして用いられることもあります。

ギリシャ語聖書中で「聖霊」と訳されている場合、そのギリシャ語は上に示したように ギリ語：プニューマ／霊 に ハギオス／聖なる を伴っています。

「霊」が述べると記される場合、ハギオスはなく単に「プニューマ」と記されており、神からの聖霊と区別しているようです。

啓示の中にも幾らかそうした例が見られます。

(啓示 14:13)「彼らはその労苦を休みなさい、彼らの行なったことはそのまま彼らに伴って行くからである、と霊は言う」。

それで、「霊」が語るというのは恐らく、神のご意志を代弁したみ使いが語っている場合にそのように記されているのかもしれませんが。